第1章

川越市の景観特性

1　歴史的変遷にみる景観特性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

2　川越市の景観特性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

（1）歴史的景観の特性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

（2）自然的景観の特性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

（3）市街地的景観の特性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

3　地区別の景観特性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

（1）本庁地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

（2）芳野地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

（3）古谷地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

（4）南古谷地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

（5）高階地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

（6）福原地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

（7）大東地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

（8）霞ケ関地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

（9）霞ケ関北地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

（10）川鶴地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

（11）名細地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

（12）山田地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

1　歴史的変遷にみる景観特性

本市は、関東ローム層が作った洪積台地と、入間川などの河川がつくった沖積平野からなる高低差の少ない土地です。台地は、市域の南部から西部にかけて位置し、河川は、荒川が東部の市境を流れ、入間川が南西部から北を回り東へ弧を描いて流れ、荒川と合流しています。

中心市街地は、市域のほぼ中央に形成され、旧城下町を起源とする北部の歴史的な町並みと、川越駅や本川越駅を核とする南部の商店街を中心に、幹線道路沿いに放射状に、かつ、環状に拡大してきました。

市域の南部では、国道 16 号や国道 254 号沿いに沿道の市街地が形成され、近隣都市まで連たんしています。また、鉄道駅を中心に副次核となる市街地が形成されてきました。田園地帯は、荒川や入間川を中心とした河川沿いの水田地帯と、台地上に展開する畑作地帯や樹林に分かれます。

【古代の川越】

武蔵野台地の上には、多くの遺跡が分布しており、旧石器時代以来の人々の生活がうかがわれます。縄文時代の遺跡は、仙波（せんば）や南大塚、下小坂（しもおさか）などの台地の縁辺部に広がり、的場（まとば）地区には弥生時代の集落跡が確認されています。

古墳時代に入ると、主な台地の上に古墳群が形成されるようになります。特に、南大塚古墳群の「山王塚（さんのうづか）」や「的場の牛塚（うしづか）」は、史跡として市の文化財指定を受けるとともに、川越景観百選や川越百景（第 2 章 2（2）参照）に選定されるなど、地域のシンボル的存在になっています。

山王塚古墳

また、入間川流域の豊田本周辺には条理制の遺構が見られたことなどから、早い時期に集落があったことが分かります。現在の大東地区にみられる屋敷林と家々からなる集落景観が、本市の田園地帯の都市景

観の原型です。

奈良時代に入ると、現在の上戸新町周辺に入間郡家があったことが推定され、東山道武蔵路もその近傍を通っています。この時代、入間川左岸の台地は、水運と合わせて、すでに要衝の地になっていました。

平安時代になると、沖積平野の開発が進み、自然堤防上にも集落が進出し、本市の東部にみられる農村景観が形成されてきました。

また、仙波の星野山無量寿寺（現、中院、喜多院など）をはじめ、古谷地区の古尾谷八幡神社、灌頂院などが創建されました。

【中世の川越】

河越館イメージ図

平安時代後期より台頭してきた武蔵武士の一族である河越氏は、入間川左岸の上戸に館を構えました。その跡は、昭和 59（1984）年に国の史跡に指定され、平成 21（2009）年にその一部が公園として整備されました。川越景観百選や川越百景にも「河越氏館と常楽寺」として選定された重要な史跡景観の一つです。

河越（川越）城は、長禄元（1457）年に古河公方に対するため扇谷上杉氏が家宰（家老）である太田道真、道灌親子に築かせたもので、武蔵野台地が沖積平野に舌状に張り出した先端部に位置します。

その後、小田原北条氏の台頭により、山内・扇谷両上杉氏との間に天文 15（1546）年に河越夜戦が起こり、北条氏の支配下となります。この頃より、城下の形成が始まったものと考えられます。蓮馨寺などの城下の主だった寺院は、この時期に創建されました。

河越夜戦跡　東明寺

室町時代に関連する景観の要素としては、市指定史跡「川越夜戦跡」の志多町の東明寺とその周辺が、川越百景に「東明寺、河越夜戦跡と門前」として選定されているほか、市指定史跡「砂久保陣場跡」の砂久

保の稲荷神社と集落が、「砂久保の集落と稲荷社」として選定されています。

【近世の川越】

天正 18（1590）年の徳川家康の関東入部に伴って、川越藩が設置されました。

寛永 15（1638）年の大火は、城下や喜多院を焼失しました。大火の翌年に城主となった松平信綱は、川越城の整備とともに十ヵ町四門前という城下町の区分を整備しました。この時行われた町割が、現在の都市計画の基礎になっています。このほか、新河岸川舟運の開設や新田開発などを行いました。重要無形民俗文化財に指定されている「氷川祭の山車行事」も慶安元（1648）年に松平信綱が獅子頭等を川越氷川神社に奉納したことに始まります。

元禄七年川越図
川越市立中央図書館蔵

城下町は、札の辻を中心に、市立てをする商人町の上五ヵ町と職人町から発展した下五ヵ町、それに連たんする町人地である郷分町に分けられました。

江戸時代後期の城下町の景観は、旧南町（現、幸町）界隈では瓦葺き町家が見受けられるものの、多くは屋根に杉皮が葺かれた平入り厨子二階の町家（2 階の天井が低い伝統的な町家）でした。

これら十ヵ町四門前とよばれた地域には、今でも伝統的な建造物が比較的多く残り、歴史的町並み景観を形成しています。そして、その大部分が旧条例に基づき、平成 16（2004）年に川越十ヵ町地区都市景観形成地域に指定されました。中でも、最もよく伝統的な建造物が集積している地区が、国より重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

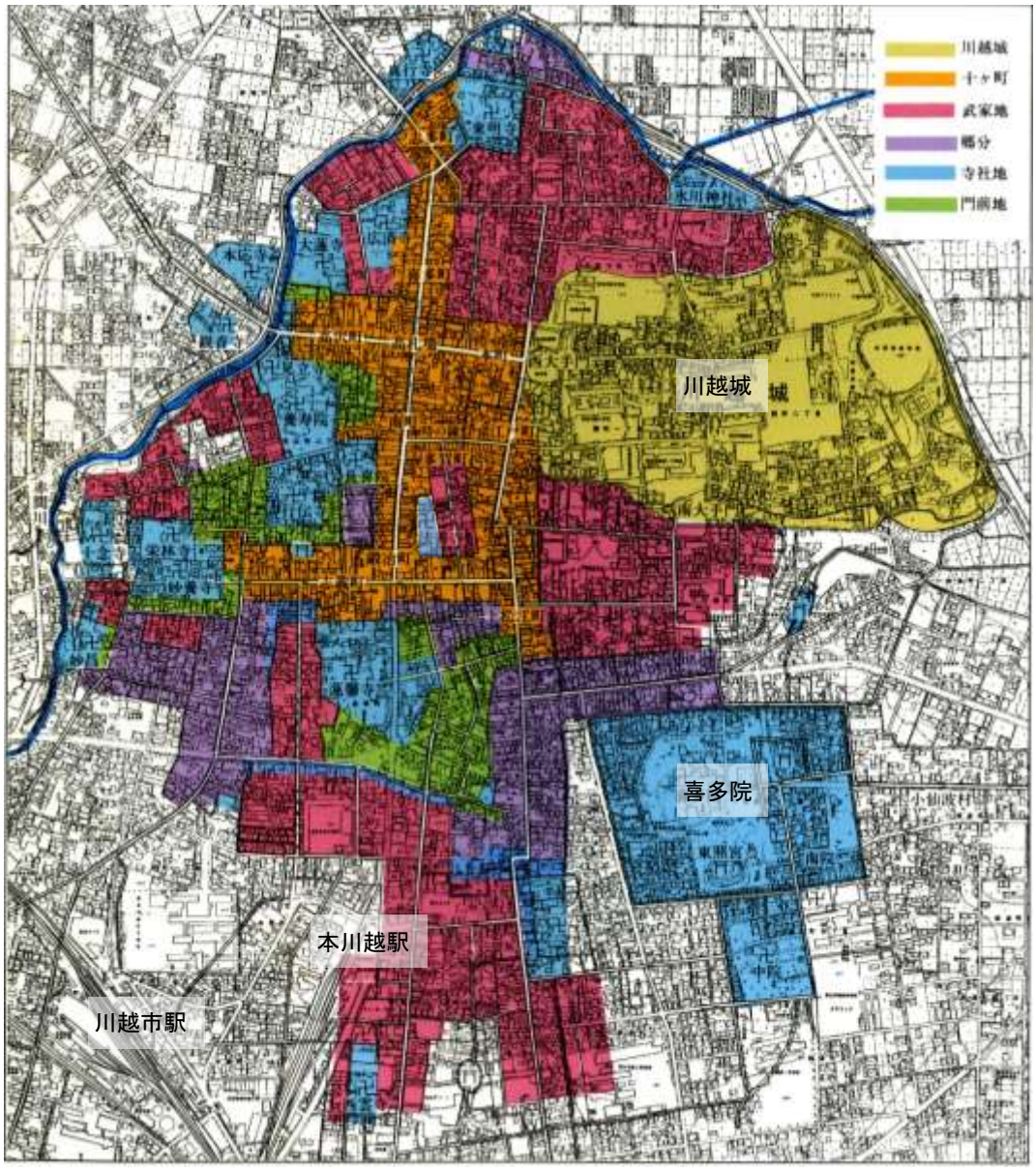

図１－１　川越城下町割図
（安永７（1778）年の川越城下大絵図を参考に作成：川越市立博物館作成）

武家地は、城の南側と北側、さらに町人地を囲むように配されました。現在の三久保町（さんくぼちょう）と宮下町、新富町から脇田町にかけての地区などです。城の南北にあった中上級の武家地では、道路より一段高い敷地に、カラタチの生け垣を巡らせ、草葺きの武家住宅が建ち並んでいました。現在、宮下町などでは、戸建てを中心とした良好な住宅地となっており、新富町から脇田町にかけては、商店街となっ

ています。これらの地区では建造物の建て替えが進み、市指定史跡「永島家住宅」が、わずかに武家住宅の面影を留めるのみとなっています。

新河岸川舟運の開設は川越と江戸を直結させ、物資の集散地としての川越に、多大な富をもたらしました。舟運は、川越五河岸（ごがし）と呼ばれる上新河岸（かみしんがし）、下新河岸（しもしんがし）、寺尾河岸（てらおがし）、牛子河岸（うしこがし）、扇河岸（おうぎがし）を中心に行われていました。

現在、五河岸のうち下新河岸周辺が「新河岸川河岸場跡」として、市の史跡に指定されています。また、その歴史的風致も良く残ることから「新河岸の河岸場跡周辺」として川越百景に選定されています。

17 世紀半ば以降、武蔵野台地では、新田開発が盛んに行われました。平地林と一体になった畑の光景という、現在の福原地区の特徴的な自然的景観がこの時代に形成されました。

川越百景には、「福原の雑木林」「福原下赤坂の集落周辺」が選定されています。また、新田開発に伴い創建された明見院では、「今福の明見院としだれ桜」が選定されています。

川越街道などの主要街道沿いには、宿場的な集落が形成されました。

図１－２　武蔵野台地の新田分布
元禄年代までに開発された新田
（川越市立博物館常設展示図録）

【近代の川越】

川越藩は、明治 4（1871）年の廃藩置県によって川越県となり、その後入間県、熊谷県を経て、明治 9（1876）年に埼玉県の一部となりました。

県庁は浦和に置かれますが、川越町は、明治に入ってからも埼玉県第一の商都として繁栄していきました。

このような中、明治 26（1893）年に大火が起こり、当時の川越町の総戸数の 3 割以上を焼失してしまいます。その復興にあたって、敷地奥に残る土蔵や寛政 4

（1792）年建築の大沢家住宅（重要文化財）が焼失を免れたのを見て、商人たちは防火性能の高い蔵造りを採り入れ、蔵造りの町並みが形成されました。

また、現在の新富町から脇田町にかけて形成されていた武家地では、畑に転用されたものも多かったようです。明治 8（1875）年の鏡山酒造（現小江戸蔵里（産業観光館）、登録有形文化財）の創業は、地域のシンボル的な存在であったことが推察されます。

大沢家住宅

小江戸蔵里（産業観光館）

明治 43（1910）年に川越織物市場（市指定文化財）が開場します。川越は、川越唐桟（とうざん）という木綿（もめん）の縞織物（しまおりもの）の産地でしたが、明治時代後半になると、周辺の町に押され勢いがなくなっていきます。そこで、織物産地としての勢いを取り戻すべく織物市場を建設しました。

旧川越織物市場

川越城内の建造物については、県庁や煙草工場などに転用された現在の川越城本丸御殿や、城内にあった三芳野神社（共に県指定文化財）など、わずかな建造物を除き取り壊され、小学校や中学校（旧制）などの公共施設や畑などに転用されていきました。

明治 28（1895）年に川越鉄道（現、西武新宿線本川越駅－東村山駅間と国分寺線）が、大正３（1914）年には東上鉄道（現、東武東上線）が開通しました。また、昭和 15（1940）年に国鉄（現、JR）川越線が開通しました。もともと市街地の拡大は、鉄道の開通により南下傾向が顕著になっていきました。

昭和４（1929）年に拡幅された久保町通りは、伝統的な町家と洋風の店舗が混在する町並みとなりました。また、昭和８（1933）年には、旧志義町の丁字路から現在の本川越駅まで、蓮馨寺の境内を貫いて中央通りが開通し、そこにはパラペットを立ち上げた洋風の店舗が連なる町並みが創出されました。

久保町通りの町並み

大正 11（1922）年には、県下で最初に市制を施行しました。

図１－３　市域の変遷
（川越市立博物館常設展示図録）

【高度経済成長期の川越】

昭和 30（1955）年に、周辺の九ヵ村を合併し、ほぼ現在の市域になります。また、昭和 36（1961）年からは、市街地の町名地番整理が行われ、現在の町名とな

りました。これにより、江戸時代以来の地名の多くが変更されました。

昭和 30 年代以降、東京のベッドタウンとしての性格が強まるにつれ、人口が急増していきます。増加した人々の多くは、東京への通勤に便利な各駅の周辺に開発された住宅地に住まいを求めました。

昭和 40 年代以降、霞ケ関地区を中心にまとまった規模の住宅団地の開発が始まり、平成に入ると伊勢原団地の開発が行われます。これらの計画的に開発された団地は、良好な住宅地景観を形成しており、公園や街路樹が川越景観百選や川越百景に選定されています。

また、昭和 41（1966）年に、川越狭山工業団地が国道 16 号沿いの大東地区に造成されたのを契機に、交通の利便性からいくつかの工業団地が造成され、工業都市としての顔も持ち始めます。大規模な工業団地もまた、川越の持つ都市景観の一つとして、川越百景に選定されています。

人口の増加に伴い、中心商業地区は市街地北部から市街地南部の本川越駅や川越駅の周辺に移動していきました。この市街地南部の地域では、昭和 39（1964）年に丸広百貨店が仲町から現在地に移ったのをはじめとした大規模店舗が進出、さらに、個人商店等の集積も進み、その結果、現在のクレアモールという県内を代表する商店街を形成することになりました。

【駅周辺の開発】

平成に入ると、川越駅東口第１種市街地再開発事業と西武新宿線本川越駅の開発が行われました。「川越駅東口広場」や「本川越ステーションビルと広場」は、現代のシンボル空間として川越景観百選に選定されています。

駅前再開発に続いて、クレアモール周辺では高層マンションの計画が相次ぎ、現在見られる中低層の商店街の中に高層マンションが林立するという景観が形成されました。

平成 18（2006）年には、旧条例による「クレアモール・八幡通り周辺地区都市景観形成地域」を指定し、平成 21（2009）年には、連雀町交差点から本川越駅までの中央通り線沿いの沿道街区土地区画整理事業の施行に合わせ、「中央通り周

辺地区」を追加しました。

川越駅西口では、少年刑務所の跡地を基に土地区画整理事業のうち、第一工区が昭和 52（1977）年に完了し、業務系のオフィスビルを中心に開発が進んでいます。第 2 工区が平成 19（2007）年に完成し、川越駅西口から国道 16 号まで幅員 25 メートルの駅前の通りが完成しました。この第 2 工区では、平成 14（2002）年に都市景観形成地域と地区計画を併せて指定し、良好な都市景観の形成を図っています。平成 26（2014）年には、川越駅西口駅前広場の改修が完了し、ペディストリアンデッキによって自動車交通と歩行者の分離が図られています。

【蔵造りの町並み保存】

市街地の北部地区では、蔵造り商家などの伝統的な建造物が多く残っており、歴史的な町並みとして注目を集めるようになっていました。昭和 50（1975）年の文化財保護法改正による伝統的建造物群保存地区（以下「伝建地区」という。）の制度化とともに、本市でも保存対策調査を行いましたが、地区の決定には至りませんでした。しかし、高層マンションの開発計画を機に、昭和 56（1981）年に「川越の町並みとデザインコード調査報告書」をまとめるとともに、同年、蔵造り商家 16 件を市指定文化財に指定しました。

昭和 58（1983）年には、後述する「川越蔵の会」が発足し、昭和 60（1985）年には、蔵造りの町並みを擁する川越一番街商業協同組合（以下「一番街商店街」という。）が「川越一番街活性化モデル事業調査報告書」をまとめ、市民によるまちづくりの取り組みが始まりました。

この間市では、昭和 60（1985）年度に歴史的地区環境整備街路事業の調査を行い、平成元（1989）年度の菓子屋横丁通り線をはじめ、現在 7 路線の整備が完了しています。

なお、平成 5（1992）年に札の辻から仲町交差点までの約 430mの区間で電線類が地中化され、平成 19（2007）年には、歩道部分の石畳化と一番街商店街の街路灯改修が行われました。

【伝統的建造物群保存地区の決定】

旧条例は平成元（1989）年に施行しましたが、同条例に規定する都市景観形成地域や都市景観重要建築物の指定については、伝建地区との関係を調整する必要がありました。

一番街商店街を貫く中央通りは、都市計画道路として拡幅が計画されていました。伝建地区として町並みを保存するためには、この計画を変更しなければなりません。道路の計画幅員の縮小と伝建地区に関する問題は、住民と行政の間に軋轢を生みましたが、その後、住民自らがまちづくりを検討する場として「十ヵ町会」を発足させることとなりました。市は、ここでの検討の結果を受けて、平成 11（1999）年に川越市川越伝統的建造物群保存地区と、地区内を縦貫する都市計画道路の幅員を縮小変更する都市計画の決定を行いました。さらに、平成 16（2004）年に旧条例に基づく「川越十ヵ町地区都市景観形成地域」を指定しました。

平成 23（2011）年には、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づく「川越市歴史的風致維持向上計画」が国から認定を受けました。

これまでの景観まちづくりの成果として、「時の鐘」が残したい日本の音風景 100 選（環境庁）、「菓子屋横丁」がかおり風景百選（環境省）の選定を受け、「川越一番街蔵造りの町並み」がグットデザイン賞特別賞アーバンデザイン賞（(財)日本産業デザイン振興会）、「川越歴史的町並み地区」が都市景観大賞都市景観 100 選（建設省）、「都市景観啓発パンフレット」が自治体優秀まちづくりグッズ賞（(社)日本都市計画学会）を受賞するなど、国やさまざまな団体から顕彰されています。

２　川越市の景観特性

本市の景観特性は、これまでの歴史や文化に基づき守られてきた伝統的な町並みや史跡などを核とした「歴史的景観」、川がもたらした肥沃な水田地帯や台地上に拓かれた畑作地帯を中心に、樹林地や河川、公園などの緑地からなる「自然的景観」、川越駅から本川越駅にかけての商業地や郊外の工業団地、新たに開発された住宅団地や沿道の開発によって生まれた「市街地的景観」の３つに、大きく分けられます。そして、これらが、ある程度ゾーニングされながらも相互に重なり合うという特性を有しています

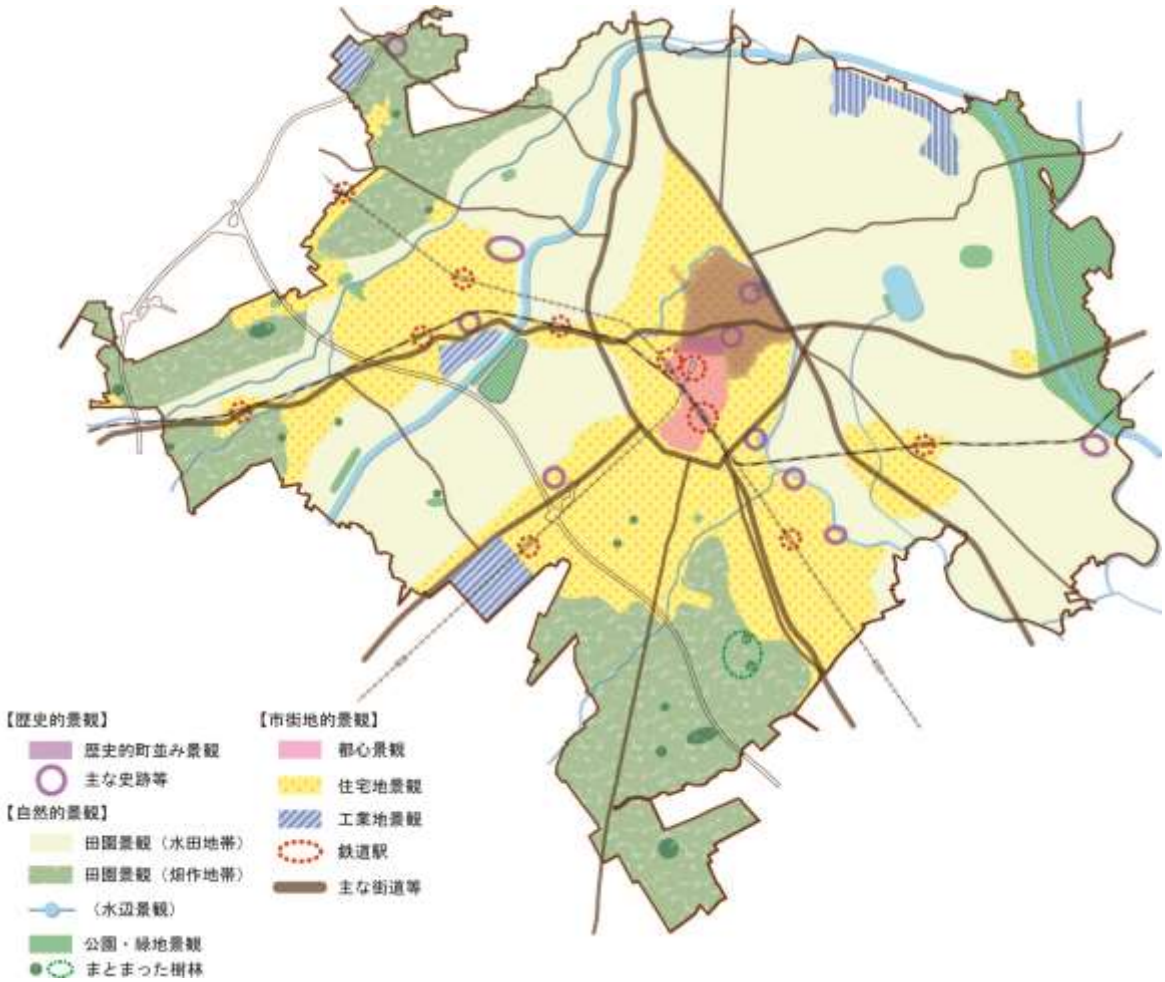

図１－４　川越市の景観構造図

（１）歴史的景観の特性

本市の中心市街地は、近世城下町を基盤としており、その面影が随所に見られます。十ヵ町四門前と呼ばれる町割は、ほぼそのままに継承され、旧町人地は商業地に、旧武家地は住宅地となっています。寺社も多く、境内の木々が町に潤いを与えています。川越城跡や喜多院周辺には、文化財が集積しています。

さらに、名細（なぐわし）地区では河越館跡（かわごえやかたあと）が整備され、新河岸川沿いの上・下新河岸や仙波河岸などでは河岸の面影を残し、川越街道では地割（ちわり）が残るなど、市内随所に歴史的景観の要素が見られます。

このような歴史的景観は、市民や来訪者を問わず、川越のイメージとして浸透しており、本市固有の特徴的な都市景観として、保存整備を推進して行く必要があります。さらに、市民との協働により、持続的な景観まちづくりに活かしていくことも重要です。

主な歴史的景観

歴史的町並み景観	伝統的な建造物が集積・連たんしている地区の景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・伝統的建造物群保存地区とその周辺の町並み（養寿院などの門前通り、鐘つき通り、仲町通り、寺町通りなど）
	・菓子屋横丁、大正浪漫夢通り
	・喜多院周辺や松江町、久保町の町並み
史跡景観	史跡など単独で歴史的価値の高い建造物がつくる景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・川越城本丸御殿、三芳野神社
	・河越館跡史跡公園
	・河岸跡 仙波河岸、上・下新河岸、扇河岸、牛子河岸、寺尾河岸など
	・主要な寺社 喜多院、中院、養寿院、行伝寺、蓮馨寺、妙養寺、灌頂院、蓮光寺 川越氷川神社、古尾谷八幡神社、上戸日枝神社など
	・川越街道、鎌倉街道などの道すじ
	・その他史跡・文化財、都市景観重要建築物
歴史的生活文化景観	祭りや神事などによる人々の営みの場としての景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・祭りや神事の風景（川越まつり、ほろ祭、獅子舞、まんぐりなど）

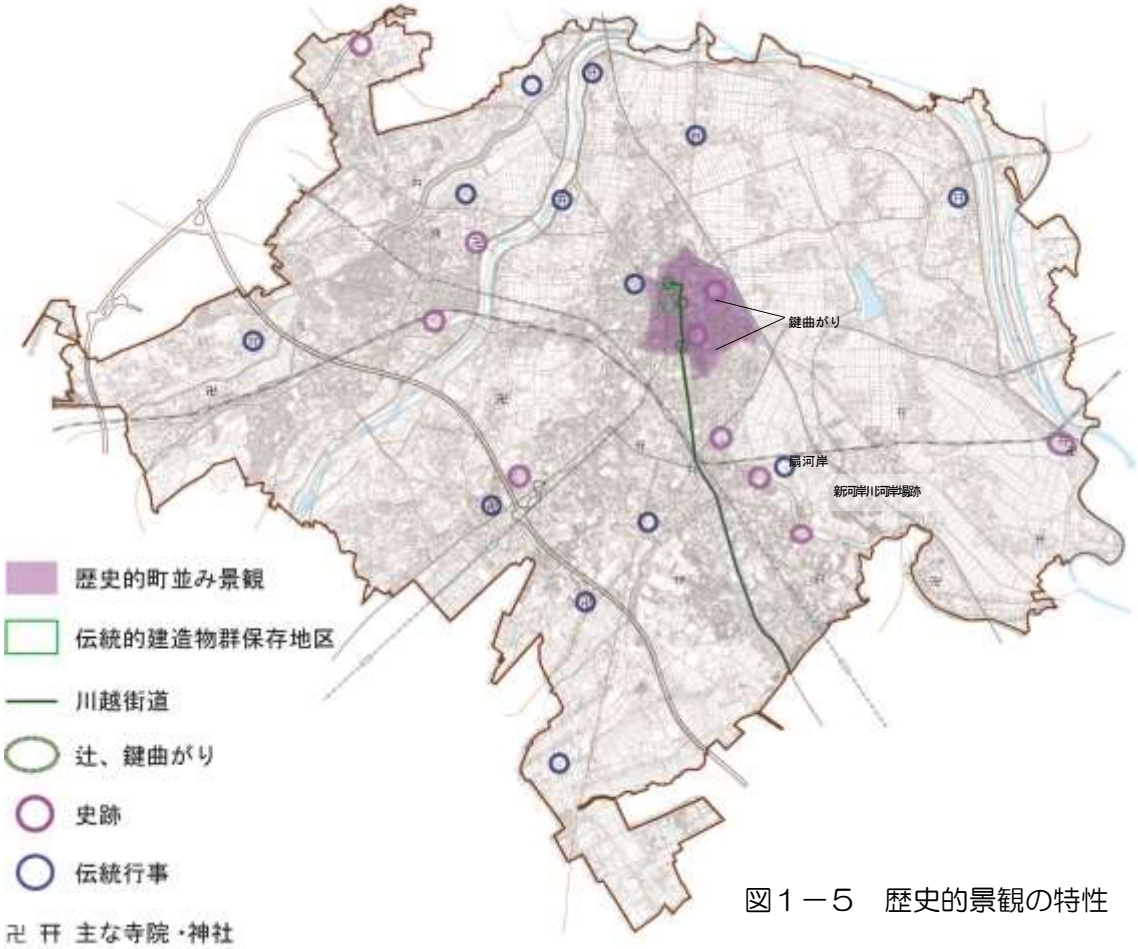

図１－５　歴史的景観の特性

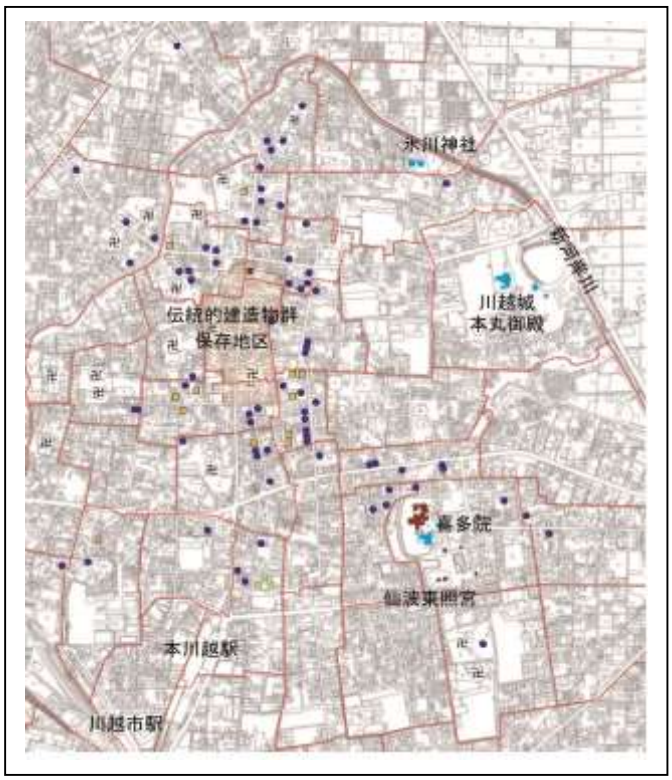

図１－６
中心市街地の歴史的景観の特性

① 歴史的町並み景観

旧川越街道の鍵曲がり

寛永 15（1638）年の大火の後に、川越藩主であった松平信綱によって整備されたのが、十ヵ町四門前（じっかちょうしもんぜん）といわれる町割です。中心市街地北部には、当時の道路形状がほぼそのまま残り、現代につながる都市基盤になっています。そのため、丁字路のほか屈曲のある道路も多く、「鍵曲（かいま）がり」「七曲（ななま）がり」として残っています。

蔵造りの町並みとして知られる伝建地区は、明治 26（1893）年の大火の後に、火災から商家を守るために建てられ、川越のもっとも特徴的な歴史的景観になっています。当時、東京の日本橋界隈の町並みを模して建てられたといわれ、今はもう見られなくなった東京の歴史的町並みを彷彿とさせてくれます。この伝建地区のほぼ中心に、川越のシンボル「時の鐘」がそびえています。

蔵造りの町並み

時の鐘と鐘つき通り

伝建地区の周囲にも、伝統的な建造物が残り、それぞれ特徴ある歴史的景観を形成しています。伝建地区の西には、寺院が多く、寺町を形成しています。そこに隣接して菓子屋横丁があります。伝建地区の南には大正浪漫夢通りが続き、一本東の通りは、市役所前交差点（川越城西大手門跡）から南に延びる川越街道沿いに、歴史的な町並みが続きます。

また、喜多院周辺や久保町通りをはじめ、それぞれに特徴をもった歴史的な町並みがあります。

② 史跡景観

川越城本丸御殿は、そのほとんどが解体されてしまった川越城の中で、わずかに残された貴重な遺構です。その雄大な姿は、かつて城があったことを示すシンボルとなっています。

喜多院もまた、広大な敷地に堂塔が立ち並び、寺院が形成する川越の代表的な史跡景観です。

このほか、江戸時代に城下町であった地区には、さまざまな寺社があり、その立地状況や特徴的な屋根の形状からアイストップやランドマークとなっているものも多く、地域のシンボル的な存在になっています。さらに、その境内の豊かな緑と広場的な要素は、低層高密な町中にあって都市景観に潤いを与えています。

これらの寺社の中でも、蓮馨寺境内は、常に人々が集う都市の中の広場として機能するとともに、桜の名所ともなっています。

川越城本丸御殿

喜多院境内

蓮馨寺

古尾谷八幡神社

江戸時代、江戸の後背地である川越の物流を支えた舟運の河岸は、旭橋周辺の「牛子河岸」「寺尾河岸」「上新河岸」「下新河岸」、１km ほど上流に上った地区にある「扇河岸」の五河岸がありました。中心市街地に最も近い「仙波河岸」は、明治に入ってから開設されたものです。

仙波河岸史跡公園

現在の五河岸周辺は、宅地や農地となり、当時の面影を残すところは少なくなりました。新河岸川河岸場跡として史跡に指定されている下新河岸周辺に、その名残が見られます。また、仙波河岸は、史跡公園として整備され、船着き場の跡が残されています。

旧川越街道沿いでは、建て替えが進み、歴史的な景観としての面影は少なくなりましたが、藤間から砂新田、岸町にかけては、地割がよく残りいくつかの寺社とともに街道の景観を形成しています。

河越館跡は、中世武士の館跡として、地域のシンボル空間になっています。

このほか、古くからの集落には寺社があり、地域のランドマークになっています。例えば、古尾谷八幡神社は、社殿が県指定文化財になっており、地域のシンボルとなっています。

③ 歴史的生活文化景観

小江戸と呼ばれる川越には、江戸との交流によりもたらされた情報や文化により、江戸文化の粋が感じられます。また、各集落にも祭礼をはじめさまざまな伝統行事が引き継がれています。これらは、伝統的な町並みや寺社の境内で執り行われ、歴史的町並み景観や史跡景観と一体となった景観を作り出しています。

特に、重要無形民俗文化財に指定されている「川越氷川祭の山車行事」は、江戸の天下祭りを模しており、伝統的な町並みと一体となって本市を代表する歴史的生活文化景観となっています。

連雀町の熊野神社での酉の市、成田山川越別院での蚤の市、川越八幡神社の年中行事、石原のささら獅子舞、古尾谷八幡神社のほろ祭り、老袋（おいぶくろ）の万作（まんさく）等は、それぞれが地域の核となる寺社で行われ、史跡景観と一体になった人々の営みが創出する都市景観となっています。

川越氷川祭の山車行事

熊野神社　酉の市

成田山川越別院　蚤の市

石原のささら獅子舞

（２）自然的景観の特性

本市は、入間川左岸の入間台地と武蔵野台地の北端部に位置する川越台地、入間川と荒川がつくった低地によって形成されています。

このような地形がもたらした本市の自然的景観は、水田や畑地、河川や樹林など多様な要素に恵まれています。

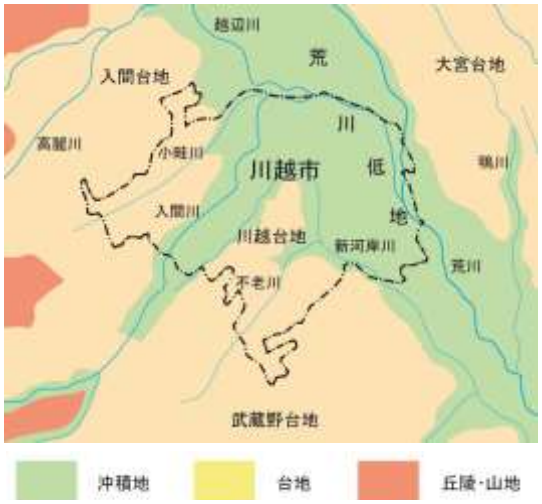

図１－７　川越市の地勢

大都市の近郊でありながらも、市街地を取り囲むように広がる実り豊かな耕作地は、人々の営みの証です。入間川や新河岸川などの大小さまざまな河川は、歴史的にも市民の生活と深く関わり、本市における自然的景観の特徴的な要素となっています。さらに、計画的につくられた公園は、市民に憩いと潤いの場を提供しています。

これらの多様な要素から成り立つ自然的景観を、保全・育成し後世に伝えていくことが必要です。

主な自然的景観

田園景観	水田や畑地などが広がる田園集落の景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・市南西部から北部・東部にかけての水田地帯
	・市西部・南部の畑作地帯
	・集落
水辺景観	河川や沼などの水辺に関連する景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・河川、湖沼
	・河川沿いの緑地や桜並木
	・橋、橋からの眺望 ・台地縁辺部の湧水
樹林景観	武蔵野の風景を残す樹林地の景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・市西部・南部における樹林地

	・段丘崖の斜面林
	・市民の森、ふるさとの緑の景観地、武蔵野ふれあいの森
	・雑木林、鎮守の森など
公園・緑地景観	**公園、街路樹などの市街地内の緑地の景観**
	＜主要な都市景観の要素＞
	・公園・緑地
	・街路樹や保存樹木など
自然的生活文化景観	**日々の生業活動の中で見ることができる風景** ＜主要な都市景観の要素＞ ・農業ふれあいセンターや卸売市場 ・茶畑、芋畑、水田などでの農作業 ・ほろ祭り、獅子舞、まんぐり、ふせぎなどの民俗行事 ・富士山、筑波山、秩父山系等の遠望

図１－８ 自然的景観の特性

① 田園景観

本市は、東京の近郊でありながらも市街化調整区域が市域の約７割もあり、田園都市的な要素も持っています。水田や畑、果樹などの耕作地は、市街地を取り囲む形で、かつ、まとまった規模で分布しています。農地に囲まれた集落では、屋敷林、雑木林、鎮守の森などがあいまって、昔ながらの田園景観を残している地域が見られます。

水田地帯は、荒川、入間川、小畔川に沿って、中心市街地を西から北、東へと取り巻いています。これらは、耕地整理が進んでおり、良好な田園景観を呈しています。川越百景にも、霞ケ関地区の「小畔川左岸の笠幡地区」、山田地区の「寺山用水沿いの田園風景」、芳野地区の「菅間緑地と水田地帯」など、数多く取り上げられています。中でも「古谷から南古谷に広がる田園風景」は、その広大さにかけて特筆すべき田園景観の要素です。また、農業用水路も生産基盤であると同時に重要な要素です。

古谷から南古谷にかけての水田の景観

福原の畑地と樹林地の景観

市域の南から西にかけては、台地上に広がる畑作地帯です。福原地区では、近世の開拓によって拓かれ、道路に沿って並んだ集落とその南の耕作地、雑木林がセットとなって武蔵野の集落の景観の様相を呈しています。これらは、等高線をうまく利用して開発されています。川越百景に選ばれた「福原　下赤坂の集落周辺」は、その典型です。

② 水辺景観

新河岸川の桜並木

市内を流れる河川は荒川水系に属し、荒川、入間川、越辺川（おっぺがわ）、小畔川（こあぜがわ）、南小畔川、新河岸川、不老川（ふろうがわ）、九十川（くじゅうがわ）、びん沼川、新河岸川放水路といった一級河川が本市で合流し、東京湾に流れ込みます。中心市街地の乗る台地の縁辺部を流れる赤間川や新河岸川は、舟運により城下町と深く関わる河川であるとともに、桜並木が整備された箇所もあり、市民に潤いのある景観を提供しています。

台地の縁辺部には小仙波弁財天、仙波河岸史跡公園、小堤八幡神社、吉田白髭緑地などに数多くの湧水が見られます。

橋が多いことも特徴です。中でも、トラス構造が印象的な鉄道橋梁はシンボル的景観です。さらに、大きな河川を渡る橋からは、周囲に広がる水辺の景観のみならず、市街地や周辺の山並みを眺めることができ、絶好の眺望ポイントです。なお、入間川にかかる雁見橋や八瀬大橋からは、川筋の正面に富士山を望むことができ、「関東の富士見百景（国土交通省）」にも選ばれています。

伊佐沼

東部の古谷地区には、県内最大規模の水面を誇る伊佐沼があります。ここの水は、農業用にも使われていますが、さまざまな水鳥たちの聖地であるとともに、蓮や桜など四季折々の草花を楽しむことができ、古くから景勝地として親しまれてきました。また、荒川や入間川の旧河道が作ったびん沼や萱沼（かいぬま）、はいだわらは、自然

びん沼

そのものが感じられる水と緑の景観です。これらはいずれも川越景観百選や川越百景に選定されています。

③ 樹林景観

本市の樹林地の多くは、雑木林です。新田開発に伴い、薪や落葉といった燃料や肥料の採取のためにクヌギやコナラなどが植えられました。笠幡地区にはアカマツも多く見られます。現在は、かつての役割を担うことは少なくなりましたが、多様な生物の生息の場であるとともに、花木の鑑賞など自然に親しむレクリエーションの場として、人々との関わりを持ちながら継承されています。

福原地区、霞ケ関地区、名細地区には、まとまった規模の樹林が分布しています。また、所沢市、狭山市、三芳町にまたがる地区は県内有数の樹林地です。これらの中には、「市民の森」や県の「ふるさと埼玉の緑を守り育てる条例」による「ふるさとの緑の景観地」として保全が図られているものもあります。福原地区と高階地区にまたがる「武蔵野ふれあいの森」は、市民が雑木林に親しむことができます。市街地の樹林地は、喜多院や東照宮をはじめとする寺社の境内地、川越城跡などに見られ、貴重な自然的景観資源となっています。

武蔵野ふれあいの森

市民の森第６号

④ 公園・緑地景観

市内の主な公園は、史跡に位置する公園として、川越城跡の初雁公園、新河岸川舟運の歴史を残す仙波河岸史跡公園、中世武士の館跡である国指定史跡河越館跡公園があるほか、大規模な都市計画公園としては、陸上競技場や体育館のある川越運動公園、県営プールのある川越公園（水上公園）、御伊勢塚公園などがあり

ます。このほかにも、伊佐沼に隣接する伊佐沼公園、入間川河畔という環境を生かした安比奈親水公園などがあり、市民の憩いの場となるとともに都市に潤いを与えています。

川越運動公園

安比奈親水公園

街路樹は、鶴ヶ島駅と川鶴団地を結ぶけやき通りや富士見町のケヤキ、おいせばし通りの桜、芳野台の川越工業団地のハナミズキなどがあり、地域の都市景観を印象づける並木道となっています。

また、天然記念物に指定されている並木の大クス、鯨井のヒイラギ、下小坂の大ケヤキなどの巨木は、地区のシンボル的存在です。

おいせばし通り

並木の大クス

⑤ 自然的生活文化景観

田園地帯には、日々の農作業に関わる人々の生活と耕作地が織りなす景観があります。万作やふせぎ、獅子舞などの伝統行事は、集落の寺社を背景にした景観です。近年では、卸売市場や農業ふれあいセンターなど、経済や地域活動と密着した施設も生まれてきました。また、耕作地を通して望む秩父などの山々の眺望も、本市の自然的景観の一つです。

（３）市街地的景観の特性

本市は、もともと近世城下町とその周辺の田園地帯からなる都市景観を形成していましたが、昭和 30 年代以降、急速に市街地化が進みました。

川越駅から本川越駅周辺にかけては、商業・業務の集積が進み川越の都心景観を形成しました。また、住宅団地や工業団地の造成、沿道の開発は、それぞれ特徴を持った市街地景観を形成してきました。平成 15（2003）年には中核市となり、業務核都市に位置付けられました。

これらのことから、本市には、充実した都市機能が求められており、都市景観の面からの充実も重要となります。そこで、本市では、商都としての賑わいを創出し、誇りを持てる商業地としての都市景観づくり、交通機関の結節点や市境などにおける街の顔となる都市景観づくり、上質な住宅地の都市景観づくり、良好な環境を創出する工業地の都市景観づくりなどを、誘導・整備していくことが求められています。

主な市街地的景観

都心景観	各駅を中心とする商業・業務施設が集積している地区の景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・川越駅から本川越駅周辺にかけての中心商店街
	・川越駅西口地区
街の顔景観	駅やインターチェンジなどの都市の結節点における景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・鉄道駅とその周辺市街地、新河岸駅、霞ヶ関駅、鶴ヶ島駅、南大塚駅、南古谷駅
	・インターチェンジや市境の橋梁
住宅地景観	住宅地を中心とした市街地における景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・住宅地を中心とした複合的市街地
	・計画的な住宅地（地区計画や建築協定の定められた地区）
沿道・沿線景観	主要な幹線道路沿道や鉄道沿線の景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・関越自動車道や首都圏中央連絡自動車道、国道等の主要道路
	・鉄道
	・並木道

工業地景観	工業団地などの景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・工業団地
市街地的生活文化景観	人が集う生活の中で生み出される景観
	＜主要な都市景観の要素＞
	・公共施設や学校など
	・商店街などの賑わい
	・熊野神社の酉の市、成田山別院の蚤の市、蓮馨寺の呑龍デーなど

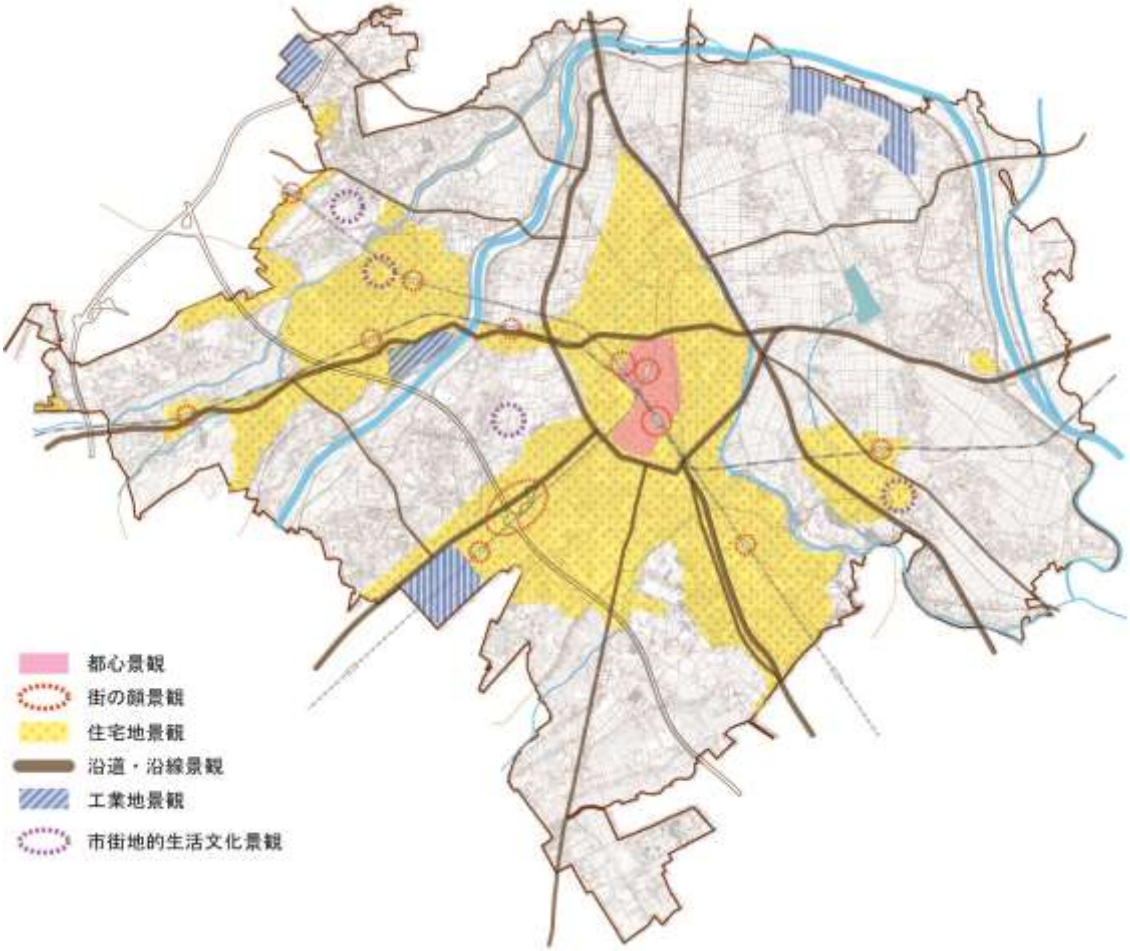

図１－９　市街地的景観の特性

① 都心景観

川越駅、本川越駅、川越市駅の３駅周辺の地区は、商業・業務の集積が進み、本市の都心を形成し、都市景観の現代の顔ともなっています。

川越駅や本川越駅は、平成に入って相次いで開発され、駅と商業施設が複合した拠点となりました。これらの２駅を結ぶ脇田町から新富町にかけては、大規模店舗を核に大小さまざまな店舗が集積し、県内でも有数の商店街を形成しており、大勢の人々で賑わう都心景観がみられます。平成 11（1999）年に電線地中化と商店街モール化事業により、延長約１km が整備されクレアモールとなりました。

川越駅西口では、土地区画整理事業により都市基盤の整備が行われ、業務系などの高層ビルによる都心景観を形成しています。なお、川越駅西口駅前広場が再整備され、さらに、埼玉県と川越市の共同事業による拠点施設（ウェスタ川越）の整備も進められており、川越の新しい都心景観が形成されつつあります。

川越駅東口

本川越駅周辺

川越駅西口

② 街の顔景観

鉄道駅とその周辺は、通勤通学、買物など、人々が集まりやすいところであるとともに、訪れた人々が初めにその町に接する景観です。そこでの都市景観は、周辺地域だけでなく、多くの人々に影響を与えます。

都心景観を形成する川越駅周辺から本川越駅にかけての地域のほか、新河岸駅、霞ヶ関駅、鶴ヶ島駅、南大塚駅、南古谷駅は、多くの乗降客があるとともに、商業の集積もあり、副次的な都心景観を形成しています。また、一部の駅では駅舎や駅前広場の整備が進み、地域のデザインモチーフを取り込む試みがなされています。

霞ケ関北地区の角栄商店街

インターチェンジ周辺は自動車利用者にとっての町の顔となる場所です。なお、市境に架かる橋もまた、川に囲まれた川越ならではの街の顔景観の一つで、橋そのものだけでなく、そこからの眺望も重要です。

③ 住宅地景観　郊外住宅地の景観

川鶴地区や伊勢原町、上戸新町などの計画的な住宅地は、道路基盤を整備し、地区計画により建物の高さや道路境界からの建物の壁面後退、敷地内緑化、垣や柵の構造等の制限を定め、良好な住宅地景観を形成しています。

また、計画的に公園などの公共施設や商店街が立地する地区もあり、まとまりのある住宅地景観を形成しています。

伊勢原地区の住宅地

上戸新町地区の住宅地

④ 沿道・沿線景観

本市は、江戸時代の街道を起源とする国道や県道などの主要な道路が、中心市街地から放射状に延びています。

これらのうち、国道 16 号、国道 254 号などの幹線道路の沿道には、ロードサイド型の商業施設が多く見られます。

国道 16 号（古谷地区）

鉄道もまた、西武新宿線、東武東上線、JR 川越線が、川越駅や本川越駅を起点に四方に通じ、それぞれ異なった都市景観を有しています。

西武新宿線は、川越狭山工業団地の中を抜けて通り、東武東上線は中心市街地と高階地区や霞ケ関北地区、川鶴地区の住宅地を結んでいます。JR 川越線は、古谷の田園地帯や霞ケ関の畑作地帯を結んでいます。

⑤ 工業地景観

郊外に立地する工業系の市街地には、川越狭山工業団地や川越工業団地などの工業団地があり、敷地内外が緑化された緑豊かな景観が見られます。

なお、首都圏中央連絡自動車道の開通により、新たな流通拠点として、鴨田地区で川越第二産業団地の造成が行われました。

また、川越百景には「川越狭山工業団地」の景観や川越工業団地の「芳野台のハナミズキ並木」が選定されています。

川越狭山工業団地

川越工業団地

⑥ 市街地的生活文化景観

商店街では、賑わいを創出する都市景観が望まれます。一方、住宅地では、安全で安心に住むことができる落ち着いた都市景観が望まれます。

このような中で、博物館や美術館などの公共施設やランドマークとなる歴史的建造物は、人々の営みの中に彩りを与えてくれます。学校もまた、さまざまな記憶に残る都市景観の一つです。

３　地区別の景観特性

昭和 30（1955）年に、旧川越市と周辺の９カ村が合併して出来たのが、現在の川越市です。そのため本市では、城下町を中心とする本庁地区（旧川越市）と経済や文化の面で強く結ばれながらも、旧村の単位を引き継いだ地区ごとに、歴史あるコミュニティを継承しています。これらの地区では、村の成り立ちと関係の深い自然的景観を背景に、歴史的景観や市街地的景観を育んできました。

ここでは、本市の都市景観を分析する上での基本単位となる、地区別の都市景観の特性を示します。

※　霞ケ関北地区は霞ケ関地区から、川鶴地区は霞ケ関地区と名細地区から区分されました。

図 1-10　地区区分図

（１）本庁地区

台地上に形成された市街地は、北部が近世城下町を起源とし、南部は川越駅や本川越駅を中心として、近代になって飛躍的に都市化した地区です。その周りを国道 16 号と国道 254 号が巡っています。

鉄道は、JR 川越線が東西に走り、東武東上線が南東から北西に向けて走っています。両鉄道は、川越駅で交差し乗換駅になっています。また、西武新宿線が本

川越駅から南西に向かって走っています。

①　川越城とその城下町

川越城跡は、現在の郭町に当たり、本丸跡は、初雁公園と県立川越高等学校となっています。往時の面影は、県指定文化財になっている本丸御殿と三芳野神社、小高く残る富士見櫓跡、中の門堀跡などにわずかに見られ、史跡景観を形成しています。

二の丸跡には、市立博物館と美術館があり、文化の発信場所となっています。そのほかにも城内には、小学校２校、中学校１校、特別支援学校、市民会館があり市街地的生活文化景観を形成しています。川越市役所も西大手門の跡に建っています。公共施設となった場所以外は、多くが戸建ての住宅地になっています。

川越市立博物館と美術館

城の南と北にあった武家地では、建て替えが進み、戸建て中心の住宅地となっています。そのため、当地区内にある中央図書館や川越郵便局なども比較的低層に建てられています。

町人地は、その多くが明治 26（1893）年の大火で焼失してしまいました。その後にできたのが、蔵造りの町並みです。幸町を中心とした約 7.8ha が国から重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けています。伝建地区の周辺にも伝統的な建造物が多く残っており、市指定文化財や旧条例による都市景観重要建築物の指定を受け、保存活用がなされています。特に、大正浪漫夢通りや松江町２丁目界隈では、国に文化財登録されている川越商工会議所や日本聖公会川越キリスト教会などのランドマークとなっている近代建築と一体になった歴史的町並み景観が形成されています。

城下町の西にはいくつもの寺が配され、いわゆる寺町を形成しています。一番街の通りから西側の小路の突き当りには、お寺の大きな屋根がアイストップとな

っています。その一つ、養寿院の北に隣接する菓子屋横丁は、職人町から発展した町並みで、表通りとは異なる独特の歴史的町並み景観を形成しています。

札の辻の北にある喜多町には、大火を免れた江戸時代中期の建築と推定される町家が残っており、江戸時代の城下町の都市景観を知る上での貴重な建築です。

仲町交差点から本川越駅までの中央通りは、昭和 8（1933）年に開通したため、沿道には、昭和初期の洋風の外観をした店舗が町並みを形成しています。また、昭和 4（1929）年に拡幅された久保町通りでは、洋風の外観をした店舗と伝統的な町家の混在する独特の町並み景観が形成されています。

これらの旧城下町のうち、12 自治会の範囲が川越十ヵ町地区都市景観形成地域に指定されるとともに、全域が平成 23（2011）年度に国から認定を受けた歴史的風致維持向上計画の重点区域になっています。

川越商工会議所

菓子屋横丁

中央通り

② 喜多院周辺

喜多院は、江戸時代初期に徳川家の信任の篤い天海僧正が住職であったこともあり、寛永 15（1638）年の大火で寺を焼失した後、江戸城の御殿が移築されまし

た。それが現在重要文化財になっている喜多院客殿などです。それ以外にも、この周辺では、仙波東照宮、日枝神社など多くの建造物が重要文化財に指定されています。また、喜多院は、正月の初大師に始まり、春は桜の花、秋は菊人形展と、1 年を通じて人々が集まる、本市でも重要な歴史的景観の一つです。

喜多院客殿

中院は、喜多院と創建を同じくしますが、しだれ桜の名所であり、島崎藤村ゆかりの不染亭も移築され、川越百景に選定されています。

成田山川越別院では、毎月 28 日に開かれる蚤の市が川越の風物詩になり、川越百景に選定されている歴史的生活文化景観の一つです。

さらに近くには、最後の川越城主、松平周防（すおう）守家の墓所である光西寺もあり、当地区は、寺社建築群で構成する歴史的景観と境内林からなる自然的景観が複合しています。

喜多院の西には、大正から昭和初期にかけて遊興の場がつくられ、今も起（む）くりをもった大きな入母屋造りの屋根が特徴の建物群があり、そのうちの何棟かは、旧条例に基づき都市景観重要建築物として指定しています。

喜多院の西側の町並み

喜多院の正面から東に抜ける小仙波地区では、間口の広い比較的大型の民家による門前集落を形成しており、何棟かの伝統的な建造物も残っています。

仙波町では、昭和初期の耕地整理の上に戸建てを中心とした住宅地形成が進んでいますが、畑地も混在しています。なお、台地の縁辺部にある長徳寺（市指定史跡仙波氏館跡）から仙波氷川神社にかけての仙波町は、建物は更新されていますが、伝統的な農村集落の地割や道路形状を良く残しています。

③　川越駅東口から本川越駅周辺

クレアモール

JR 川越線･東武東上線川越駅から西武新宿線本川越駅にかけては、もともと街道沿いに配された武家地でしたが、鉄道の開通以降徐々に市街化が進んできました。特に昭和 30 年代後半以後は、急スピードで変化していきます。

昭和 39（1964）年に丸広百貨店が移転してきたのを皮切りに、大規模店舗の集積が進みました。それに合わせ小売店舗の集積も進み、今では埼玉県を代表する商店街として賑わいのある都心景観を形成しています。

このような中、平成 2（1990）年に川越駅東口第 1 種市街地再開発事業が完成し、川越駅の駅舎が橋上化されました。川越駅東口駅前交通広場は公共の色彩を考える会の第 6 回公共の色彩賞を受賞しています。時を同じく本川越駅もホテルと商業の複合施設にかわり、現代の川越の顔となる都市景観が形成されました。

平成に入ると、商店街の周辺で高層マンションの建設が進みます。この傾向は、川越駅に近い菅原町にもおよび、高層マンションが商店街を取り囲むという都心景観が形成されました。周囲が高層化する中、小江戸蔵里（産業観光館）は、文化財登録された大型の醸造蔵 3 棟を活用した商業施設として、中心市街地北部の歴史的な町並みと駅方面の商店街をつなぐ重要な位置にあります。

当地区では、地域の自主協定の運用から始まったまちづくりが、クレアモール・八幡通り・中央通り周辺地区都市景観形成地域の指定に結びつき、川越の中心商店街としての顔づくりが行われています。

④　川越駅西口

川越駅西口は、土地区画整理事業によって基盤整備がなされました。

駅に近い第 1 工区では、業務系を中心としたビル街になっています。第 2 工区では、地区計画や都市景観形成地域の制度を用い、川越駅南大塚線沿いの商業地

とその背後の良好な住宅地になっています。また、市街地的生活文化景観を担っていくことが期待されているウェスタ川越が施工中です。

川越駅西口周辺の景観

国道 16 号の南側には、主要な通り沿いに商業系の用途が見られますが、多くは比較的低層の住宅地です。そのような中、市立川越高等学校は、その歴史や規模からモニュメンタルな存在です。

入間川街道（旧国道 16 号）や旧川越街道では、建物配置や道路形状などに歴史的な名残が見られ、烏頭坂（うとうざか）と岸町の熊野神社が川越百景に選定されています。同じく川越百景に選定されている新宿氷川神社は、通称、雀の森と言われる豊かな境内林とともに、歴史的生活文化景観であるお焚きあげが行われています。

⑤　市街地周辺

市街地の西に位置する旧田面沢（たのもざわ）周辺は、入間川の沖積地で、市街地に近い東側では住宅地化が進んでいますが、入間川に近い西側では田が広がります。田園風景が広がる中に、川越市保健所や川越市総合保健センターなどの公共施設や、私立の学校、県の景観賞を受賞した JA(農協)事務所などの施設がつくられランドマークとなっています。地区を東西に横断する県道川越日高線沿いには、店舗が連なり沿道景観を形成しています。なお、南北に縦断する北環状線により、今後、景観の変化が予想されます。

仙波河岸近傍の新河岸川

新河岸川に近い石原町や神明町は、古くから城下町と一体となった町人地が形成され、今でも伝統的な建造物が残り、旧条例による都市景観重要建築物に指定されているものがあります。

市街地の東側には、国道 16 号と国道 254 号が通り、川越警察署がランドマークになるとともに、比較的間口の広い店舗による沿道景観が作られています。その東側は、良好な田園地帯となっています。

台地の縁辺部に沿って流れる新河岸川は、春には桜や菜の花の名所となる水辺景観です。また、川沿いとその周辺は、仙波河岸史跡公園や初雁公園、濯紫公園や赤間川公園もあり、歴史的景観や自然的景観、市街地的景観が複合するという都市景観を形成しています。

（２）芳野地区

芳野地区は、本市の北東部に位置し、入間川が作った沖積地です。北から東にかけて入間川が流れ、東側は、荒川の河川敷になっています。これら河川は、当地区の自然的景観の骨格をなす水辺景観です。

当地区では、河川が肥沃な土壌をもたらし、古くから田が開かれました。自然堤防上には集落が築かれ、集落内の多くの通りは、自然の地形を生かしたゆるやかな曲線を描くという農村景観を形成しています。これらの自然的条件と農業が織りなす田園景観は、当地区の特徴的な自然的生活文化景観でもあり、保全・育成が望まれています。

入間川が流れていた名残である古川沿いの通りは、県道川越上尾線から北に延び、芳野台の川越工業団地へ続きます。この工業団地は、昭和 56（1981）年に完成し、ハナミズキの植えられたメインストリートは、川越百景に選ばれるなど、良好な工業地景観を形成しています。工業団地の拡大に際し、平成 20（2008）年に決定された鴨田地区の地区計画では、田園地帯という立地性から、緩衝帯や緑地帯などを多く取り込んだ新たな工業地景観です。

このような中に、市の都市景観表彰を受けたカントリーエレベーターをはじめ、埼玉医科大学総合医療センター、農業ふれあいセンター、川越総合運動公園などのランドマークとなる施設が設けられ、伝統的な農村風景と現代建築の対比的な都市景観が形成されています。

（３）古谷地区

古谷地区は、本市の東に位置し、地区の東には荒川と入間川が流れ、その合流点にもなっています。また、西には九十川が伊佐沼から流れ出ています。当地区は、これらの河川がもたらした肥沃な沖積地で、豊かな穀倉地帯となっています。

集落は、自然堤防上に、築かれていますが、中でも鎌倉時代の武士であった古尾谷氏の館と推定されている堀の内の善仲寺周辺は、堀の痕跡なども残り川越景観百選に選定されています。また、古谷本郷地区は、中世古尾谷荘の中心的存在であった総鎮守古尾谷八幡神社（県指定文化財）と灌頂院があり、それらを取り囲む樹林を合わせ、古谷地区のシンボル的な都市景観となっています。なお、古尾谷八幡神社で行われる県指定文化財ほろ祭は、古谷本郷の集落と相まって本市の中でも独特な歴史的生活文化景観を形成しています。

古尾谷八幡神社

当地区の各集落には、度重なる洪水から家財を守るために、水塚（みづか）と呼ばれる一段高い地盤を築き、その上に土蔵等を建てるといった工夫がなされるなど、水害の歴史を刻む歴史的景観も見られます。これら水塚の法（のり）面に植えられた草花や生け垣、屋敷林と、周囲に広がる水田の織りなす景観は、荒川に近い集落ならではの田園景観です。

水塚の築かれた風景

芳野地区にまたがる伊佐沼は、県内最大級の水面を誇り、古くから景勝の地でした。蓮や湖岸の桜並木、伊佐沼公園など本市を代表する自然的景観の一つです。

伊佐沼の風景

国道 16 号が地区を東西に直線的に横切るため、今後、軸線性の強い景観構造がつくられていくことが想定されます。さいたま市との境にかかる上江橋は、周囲より一段と高く、国道は川越の市街地に向かって下って行きますが、橋の上からの眺望景観は、市街地の背景として秩父から奥多摩、遠くは富士山まで望むことができ、市内でも随一です。また、その下流には JR 川越線の鉄橋もかかり、大宮方面からのアプローチとして、田園風景の先に川越の市街地を望む街の顔景観を形成しています。

（４）南古谷地区

南古谷地区は、本市の南西部に位置し、古谷地区と同様に河川がもたらした肥沃な穀倉地帯で、古くは古尾谷庄 13 ヵ村の一部を構成していました。東側は、荒川の旧川道が境となり、西から南は新河岸川が境となっており、基本的には、自然堤防上の集落が築く田園景観です。

奥貫家の長屋門

久下戸（くげど）は、ゆるやかにカーブする自然堤防上に築かれた集落で、屋敷林を構えています。この中でも、奥貫家は、敷地の周りに濠を構え、市内最大級の長屋門をもった豪農の屋敷で、地域のランドマークとなっています。なお、当家は、寛保 2（1748）年の大水害の時、当主の奥貫友山が私財を投げ打って農民の救済に当たり、その墓が県の旧跡に指定されるなど、久下戸の精神的なシンボルにもなっています。

蓮光寺周辺の新河岸川沿いは、ふじみ野市側の河岸段丘の豊かな自然が借景となっています。新河岸川は、近年水害から地域を守るために河川改修が行われ、川幅が大きく広がりました。

JR 川越線が地区の北寄りを横断しています。南古谷駅周辺には、土地区画整理事業により都市の基盤整備が整った地区もあり、住宅地化が進んでいます。特に泉町は、南古谷駅西地区地区計画を決定し、大規模な商業施設と高層と低層の計画的な住宅団地からなる複合都市として、当地区の中核的存在となっています。

また、東邦音楽大学の新校舎棟「70 周年記念館」と音楽ホール「グランツザール」は、共に市の景観賞を受賞するとともに、移築された木造の旧校舎も都市景観重要建築物に指定され、新旧の建物が調和した良好なキャンパスの景観を創出しています。

富士見川越道路（国道 254 号）が縦断し、当地区は、本市の東の玄関口となっています。

（５）高階地区

高階地区は、本市の南東部に位置し、新河岸川右岸の台地上にあります。地区内には、国道 254 号と東武東上線が北西から南東にかけて地区を縦断しており、重要な都市軸を構成しています。このように交通の至便なことから、昭和 30 年代後半より住宅地化が進んできたため、狭小な道に住宅が密集している地区もあります。

土地区画整理事業が完了した地区では、低層の良好な住宅地景観を形成しています。これらの新旧の住宅地には、畑地も多く残っており、住宅地と農地が混在した都市景観を作り出しています。一方、国道沿いには、沿道型の店舗が連続する郊外型の沿道景観が形成されています。

廻船問屋の名残を残す伊勢安

地区の北東端の新河岸川に面する上新河岸や下新河岸を中心とした川越五河岸は、城下町川越の経済を支えた流通の拠点でした。「廻船問屋伊勢安（かいせんどんやいせやす）」は、往時の面影を再現し、市の景観賞を受賞するとともに、土蔵は市指定文化財になっています。また、これ以外にも伝統的な建造物が比較的多く残され、河岸場を望む日枝神社とともに、河岸の歴史的町並み景観を形成しています。旭橋や対岸の牛子河岸は、河川改修によって大きく変わってしまいましたが、上・下新河岸の周辺は、本市における重要な水辺景観と一体となった歴史的景観を有しています。

寺尾地区の日枝神社は、史跡景観として、また鎮守の森は樹林景観として川越

百景に選定されています。同じく川越百景に選定されている寺尾調整池は、新河岸川の洪水対策のため近年整備されたものですが、水辺景観として市民から親しまれています。

国道と並行する旧川越街道沿いは、近世の地割を基本とした街道沿いの集落の景観が見られます。中でも、本殿が市指定文化財となっている春日神社は、塚の上に建ちランドマークとなっています。

旧川越街道と春日神社
（砂新田）

地区の西で接する福原地区との境には、まとまった樹林があり、森林公園が構想されています。

新河岸駅周辺では地区計画を決定し、良好なまちづくりが始まるとともに、駅舎の改築も予定されています。

当地区は、東京方面からの玄関口であり、新河岸駅周辺は地域の拠点としての街の顔景観という特性ももっています。

（６）福原地区

福原地区は、本市の南部に位置し、武蔵野台地の深奥部にあたります。

県道川越所沢線からみた
畑地と樹林地

17 世紀半ばの松平信綱時代から、新田開発が盛んになりました。今でも、集落の背後に平地林を抱き、南側の通りを挟んで広大な畑地が広がるという当時の地割をよく残しています。屋敷林とつながる雑木林は、緩やかに北側に傾斜する段丘に沿った平地林で、等高線沿いに南西から北東に向かって長く連なっています。なお、地区内の道路は等高線に沿っているため、南北に直線的に貫く県道川越所沢線と、すべての道が斜めに交わっています。

砂新田では、集落の通りの突き当たりに砂久保稲荷神社が位置し、格好のアイストップになっています。本殿は建造物として、周辺は河越夜戦の陣場跡として市の文化財に指定されています。また、ここは、屋敷林や生け垣が美しい集落です。

砂新田の集落と
砂久保稲荷神社

高階地区との境には、市内で最もまとまった樹林が残っており、森林公園が構想されています。

砂新田地区のまとまった樹林

当地区の北部では、工場や住宅などの開発が進み、南部の下赤坂周辺では、多くの工場が立地し、田園景観にも変化がみられます。

新田開発によって形成された地割からなる当地区は、武蔵野の典型的な田園景観を基礎としています。

（７）大東地区

大東地区は本市の南西部に位置し、武蔵野台地と入間川が作った扇状地状の低地に分かれ、西から北にかけて入間川が流れ、南から東にかけて台地が広がっています。

山王塚古墳

入間川が作る低地は、古くから田が開けた地区で、屋敷林を持った集落が点在しており、田の区画や集落内の道路等近世の地割の面影をよく残しています。そうした中、台地上では山王塚などの古墳の森が、樹林景観をつくってきました。

入間川が作った河岸段丘は、狭山市に近い所では急峻で、下流に下るに従って

緩やかになるとともに、各所で開発が進み擁壁に変わってきています。

河岸段丘に沿った台地上には、狭山市に向かう旧国道 16 号が通り、街道沿いの集落が形成されてきましたが、近年では住宅地化が進んでいます。これに並行する国道16号では、沿道型の店舗が集積するという沿道景観を形成しています。なお、冬に国道 16 号を狭山市方面に向かうと、正面に富士山を望むことができます。

国道に並行して西武新宿線も走っており、当地区は狭山市や所沢市方面からの玄関口でもあり、南大塚駅周辺は、地域の拠点としての街の顔景観という特性も持っています。

これらの軸線に交差して、関越自動車道や都市計画道路外環状線が、地区の北東から南東にかけて通っています。

南台 1 丁目は、本市と狭山市にまたがる川越狭山工業団地を形成しており、大規模な工場地景観を作っています。

川越狭山工業団地

樹林に囲まれた埼玉川越総合地方卸売市場、川越公園（川越水上公園）、池辺公園、尚美学園大学などの大規模な施設が、地域のランドマーク的存在になっています。

（８）霞ケ関地区

霞ケ関地区は、本市の西部に位置し、南に入間川が流れています。中央部に小畔川が低地を作るほかは、その多くが台地になっています。

関越自動車道から西側の小畔川沿いには、良好な田が広がり、北側の台地の麓に斜面林を背負った集落と相まって、良好な田園景観を形成しています。

尾崎神社の森

台地上では、樹林が比較的よく残るとともに、畑と集落が混在した景観を作っています。中でも、美

しい森が保全されている尾崎神社では、市の無形民俗文化財に指定されている芳地戸（ほうちど）のふせぎが行われ、歴史的生活文化景観を形成しています。

近年では、住宅地の開発が進み、かすみ野は低層の戸建て住宅団地として開発され、良好な住宅地の景観を形成しています。

かすみ野の低層住宅地

当地区の中央を、県道川越日高線と、これに並行して JR 川越線が、東西に横切っています。これらを中心に住宅地化が進むとともに、県道沿いでは、沿道型の店舗が見られます。

当地区の東の入間川に架かる雁見橋に近い地区では、県道沿いに霞堤（かすみてい）が残り、東京国際大学第２キャンパスや、霞ケ関東小・中学校の木々と一体となって、緑豊かな沿道景観を作っています。

地区内には、市民の森が 4 カ所指定されているとともに、入間川沿いには市民の憩いの場として安比奈親水公園があります。

雁見橋に近い入間川左岸には、工場が立地しています。

（９）霞ケ関北地区

霞ケ関北地区は、本市の西部、霞ケ関地区の北東部に位置し、東に入間川、北に小畔川が流れる台地の上にあります。

御伊勢塚公園

昭和40年代からの比較的大規模な住宅団地の開発により、それまでの田園景観や樹林景観などの自然的景観は、面影があまり見られなくなりました。しかしながら、計画的な開発により公園等が適度に配置され、良好な住宅地景観を形成しています。中でも、カッパのモニュメント彫刻がある御伊勢塚公園周辺は、川越百景に選ばれ、脇を流れる小畔川と一体となって地域のシンボル的な公園となっています。

当地区には、東京国際大学のキャンパスがランドマークとなり、角栄商店街が賑わいをもたらしています。霞ヶ関駅周辺は、地域の拠点として街の顔景観という特性も持っています。

（１０）川鶴地区

笠幡公園

川鶴地区は、本市の西部、霞ケ関地区と名細地区に挟まれた小畔川左岸に位置しています。

昭和 50 年代に日本住宅公団(当時)により、鶴ヶ島市側と合わせて土地区画整理事業が行われ、主に中層の共同住宅と戸建ての専用住宅からなる地区です。当地区にある川越笠幡地区地区計画は、昭和 58（1983）年に本市で最も早く地区計画を決定し、建築物の高さや壁面の位置、垣や柵の構造の制限により、良好な低層の住宅地景観を形成しています。

笠幡公園やケヤキ並木、ハナミズキ並木が地区に潤いを与えるとともに、小畔水鳥の郷公園は小畔川を挟んで御伊勢塚公園とも一体となって、川越百景に選定されています。

（11）名細地区

東洋大学キャンパスの並木と
校舎建築群

名細地区は、本市の北西部に位置し、東に入間川が、中央に小畔川が流れています。

西側は台地上で、樹林と畑が混在する景観でしたが、近年では開発が急激に進み、戸建て住宅が増えています。このような中、天沼新田では、広大な屋敷林を背後に抱え、南側に畑を持つという伝統的な田園景観を比較的良く残しています。

当地区の東側約３分の１は、河川が作る低地で、水田が広がる中、台地の先端

部や自然堤防上に集落が築かれています。

樹林地は、北側の坂戸市境周辺に残っています。また、東洋大学の敷地では、樹林を活かすとともに校舎建築群がシンボリックな景観を創出しています。

街の顔景観として、東武東上線の霞ヶ関駅と鶴ヶ島駅があり、この両駅を中心に市街化が進んでいます。鶴ヶ島駅前通り線は、商業集積が進むとともに、ケヤキの並木通りになっています。また、竹野には富士見工業団地がありますが、緩衝緑地を設けるなど良好な工業団地景観を形成しています。

富士見工業団地

この地区を特徴づけているものは、中世の遺構が良く残っていることです。国指定史跡の河越館跡は、一部が公園として整備されました。また、県の史跡になっている大堀山館跡は、堀や土塁の形状をよくとどめています。本殿が市指定文化財になっている上戸日枝神社は、霞ヶ関駅から北に延びる道路のアイストップになると共に桜も見事です。名細中学校の南に隣接する市民の森には、鎌倉街道の一部も残っています。さらに、小堤の八幡神社の社叢、市の天然記念物である下小坂の大ケヤキ、鯨井のヒイラギなどの緑も、当地区ではランドマーク的存在です。

河越館跡の史跡公園

上戸日枝神社の境内

地区をほぼ東西に貫く県道川越・坂戸・毛呂山線の小畔川以東では道路に沿った集落が見られ、以西では鶴ヶ島駅周辺に沿道型の店舗が見られます。

小畔川のほとりに川越市資源化センターがあり、その規模と、高い煙突から、

ランドマークとなっています。今後、隣接地のなぐわし公園と共に、地域のシンボル的空間になることが期待されます。

（１２）山田地区

寺山用水周辺

山田地区は、本市の北部に位置し、入間川が作った沖積平野です。西から北にかけて入間川が巡り、地区内には大小様々な用水が張り巡らされています。

かつて、水田と集落が織りなす田園景観でしたが、国道 254 号が南北に通ることによって、沿道型の土地活用が進んでいます。地区の南側では、住宅地の開発が進んでおり、それに商業施設や田が混在するという景観になっています。

川越北環状線の開通や首都圏中央連絡自動車道の川島インターチェンジに程近いこと、県道川越・栗橋線や片柳・川越線が通ることなどから川越の北の玄関口となっています。

この地区は、福田、上寺山、石田の 3 地区の獅子舞と藤宮神社の筒がゆ神事が市の無形民俗文化財に指定されるなど、伝統行事が盛んに行われ、都市化の中にも歴史的生活文化景観が生きていることが分かります。